自山中国ノ

中宫

叹立と

の発展にともない白山登拝

白山信仰

元徳2年(1330)閏6月 白山中宮八院衆徒等申状案(部分)(横浜市 称名寺所蔵/神奈川県 立金沢文庫保管) 護国四天王院・昌隆寺・松谷寺・長寛寺・蓮華寺・涌泉寺・末寺岩蔵寺八院の 草創について記すが、善興寺・隆明寺はみえない。国守・目代・在庁官人が願主となり、建立や寺地 が寄進されている。涌泉寺の敷地国免は、建久6年(1195)10月とする。

年八月日報坐整新正次信修之明在衛等沒等

此色以至法道色在完多地由更五作

大子五十十八十八万七次を四山木等に去れれ九月八點

下了像教的人的亦名也小是他是要什么我才明五月日日外子被教的人名子一月日外

基家の子保家から、もといえ 子 皇 加賀守は加賀の 伸 宮は能美・江沼両郡に宗勢を 末寺として成立していた。 0) 安元元年(一一七五)十二月、 原 寵 師 臣 勢威を誇ってい 高に交替した。 | 西北 (藤 知行国主藤 が原 師る 後白 光記 後白 た。 河 中 原

次の内口代或力而の母果中去で用十九日で指表所

於打其八多次出出住代、四次看院院

唇不此件仍實院之本考及故事者大法等了

本宮四 白山 は中宮八院)、十二世紀中頃に 国こ となっている。 宮は久安三年(一一 0 自に発展しながら連携もあった。 白 **|衙に対峙する形でその東南に位置**| 拠点加賀馬場 山 中宮八院といわれ(『白山之記』 • 宮 別宮は中宮三社と称し、 社 に対 現、 Ĺ 白山比咩神 涌泉寺など八か寺は、 が形成され、 中宮を中心とする佐 四七)延暦寺 社 が 白はなる人 中 双方 は \dot{O} 本はんぐう 中 末 白 心 ţ で 宮 寺 Ш 独 0

たが、 寺社・ 当時涌泉寺の寺地は国 から、 注点 白山中宮八院の一 を奪回 官)として加賀国衙 河法皇は平家準 翌年 (立入検査) 軍勢を率い 寺僧の激しい反発をうけたこと Ó 権門領に対し非法を重 したのである。 夏、 師 を実施しようと入部 高 つ鵜川の 門から 涌泉寺を焼打ちした。 の弟師経が目代 に入って間もなく 師高 衙の免税地でな 加 涌 賀の は、 泉寺の検 ね ってい 加賀 知 行 代 0) 権



国指定重要文化財『白山之記』(白山市 白山比咩神社所蔵) 長寛元年(1163)ころ成立と推定される白山宮最古の縁起。



『平家物語絵巻』巻第一下「鵜川合戦の事」(部分)(岡山市 (財)林原美術館所蔵) 検注のため涌泉寺に立ち入った加賀国の目代藤原師経 は、湯屋にまで押し入り、師経みずから湯浴みをし、さらに馬をも洗わせた。寺僧たちは、昔よりこの寺は国衙役人が入部することはないと横暴 の停止を求めたが、師経は聞き入れず、噴慨した寺僧は師経秘蔵の馬の足を折り、師経方と寺僧の間で射あい斬りあう乱闘となり、師経方は 敗色が濃くなって退散した。この後、師経は涌泉寺を焼打ちする。

経兄弟の処罰を勝ちとるため

0)

神輿を奉じ、

師高·

本寺延暦寺の支援を求めて上

が決定した。 前 洛することになる。 0 強訴 を展開し、

中宮三社八院の衆徒は後白河法皇に空 早松社の神輿を奉じた、延暦寺・ (台座主 四月延暦寺の主導のもと、日吉七社・ 一明雲は解任 その後強訴の張本として 師 流罪となったが 高 師 経 0) い流罪 白 Ш

側 覚明らを張本に大挙して国 徒を結集し、惣 三社八院の衆徒は、 を襲撃したが、 まさに暴挙であった。 11 注それ自 逃亡した。翌年正 の制止をふりきり白 ように焼打ちにいたっては をはかる意図とは 涌泉寺から通報をうけ 白山中宮三社八院の衆 白山権現に挑戦するか 「体は不法とはいえな 目代師経 長 更り 佐羅宮早はや 万、 一 いえ、 山中 には京 □積√ た中 国 宮 衙 検

五柱民子少出日人又草板人社 しかえるかしかしばれ日都中所は降 十四年二武於二俸校子三百五十年 一五人、地工解為師録の子様 斯田平 輸入首等者の際メルラ 衛在一東人此前柳下中 ※指三日ノ地町 ※を 半點会納州所服 田村田本 職物事へでもせる かへと切すべ用 瀬での他六 N. 125



く

目

代師経

が白

Ш

野力の

削

『源平盛衰記』巻四「白山神輿登山ノ事」(金沢市立玉川図書館所蔵) 白山中宮の衆徒が延暦寺 に訴えんと、佐羅宮早松社の神輿を奉じて発向した様子を記す。

谷事件)、 六月一 社 延暦寺衆徒は流罪途中 八院との対立に発した安元事件 加賀守師高・目代師経と白山中宮三 日平氏打倒計画が発覚し 西光父子は殺害された。 \dot{O} 明雲を奪還 (鹿 は

後白河法皇と平清盛との対立激化など

・央政界を揺るがした。

(清水郁夫